●春日部市民文化講座（第 14 回）

◆日　　時：2015 年 1 月 28 日(水) 10 時（ぽぽら春日部 4 階会議室）～11 時

◆テ ー マ：講演「ボランティアガイドから見た宿場町春日部」

講師：篠　信子さん（春日部観光ボランティアの会）

◆ゲスト紹介：栃木県・・生まれ。10 年前に春日部観光ボランティアの会を設立。粕壁宿定期ガイド、日光街道粕壁宿めぐり、籐花園の開園時期のガイド、ふるさと散策及び各種イベントへの参加などを行ない、この街の魅力を発信し、活性化のために活動している。

■観光ボランティアを始めるきっかけ

最初に、私が観光ボランティアを始めたきっかけから話させていただきます。私の出身地は那須温泉なのです。私が小さい頃の話ですが、黒磯駅で降りるとガイドさん付きのバスが那須高原まで走っていました。ボストンバッグなどを持ったお客様が乗ると「ようこそ那須高原においでくださいました。那須温泉までは 40 分で到着の予定でございます」と迎えるのですよ。私はそのバスガイドさんの口調が今でも耳に残っています。その後、東京に出てきて浅草に住みました。住まいの隣に浅草寺の住職さんが住んでおられて、休日になると観音様の掃除に誘われました。浅草寺に行きますと、ここでもバスガイドさんがお客さんを連れて案内されていたのです。こうした偶然が重なり、ガイドというのが身の周りにあったのですね。そして嫁に来たのが春日部でした。春日部に来たら何にも無かったのですね。それはとても寂しいものでした。それで、私が春日部の良さを PR しようと思って始めたのが観光ボランティアでした。

■ボランティアガイドが語る宿場町

それでは資料『ボランティアガイドが語る宿場町』を見ていただきながら話を進めさせていただきます。最初に宿場とはどういうものだったのでしょうか。それは、幕府から宿駅業務をするようにと指定された町のことを言うのですね。その宿場町には、名主、年寄、百姓代と呼ばれる村方三役、陣屋、差配する問屋役などもいました。宿役人もいました。今の春日部市に市長さんや職員さんがいるように、宿場にも束ねる人や役人がいたのですね。粕壁宿とは、日光街道 23 宿のうち江戸（日本橋）から第 4 番目の宿場町だったのです。千住、草加、越谷、粕壁で 4 番目だったのですね。日光までは大沢を 3 つに分けまして 23 宿になります。規模としては、23 宿中で 6 番目の大きさだったそうです。日光道中になったのは、宿場ができて 100 年後なのですね。そんな日光道中を通ったのは、大名や商人、旅人たちですが、有名なのが芭蕉さんです。粕壁宿は江戸から 9 里 2 町でしたので、ちょうど 1 日の行程としては泊まるに良い場所でした。芭蕉さんは草加・越谷ではなく、『曾良日記』にあるように粕壁に泊まったと言われています。ただし、東陽寺さんではなく、大店や旅籠だったのではないかと思われます。粕壁宿が大変賑わった時が 1636 年です。日光東照宮が造営されて、造営に当たった職人たちで賑わったとされています。宿場の規模は天保 14 年の記録に綴られていますが、書いてある通りです。粕壁宿には 10 の町がありました。内出、陣屋、上宿、中宿、裏町、三枚橋、大砂、新々田、寺町（新町）とありました。寺町は上（最勝院側）と下（一宮側）にありましたので 10 になります。この町名は、春日部大通りの変電ボックスに描かれています。現在、粕壁宿の面影を残すものとしてシャッターアート〔写真：木村呉服店〕として描かれたものがありますので写真をお回しします。現在、35 枚のシャッターアートがあり、早朝ガイドでご覧いただけますので、どうぞ興味のある方はお声掛けください。

■粕壁宿と産業

宿場には隣の宿場まで、人や荷物を運ぶ人足や馬を用意することが義務づけられていました。今で言えばタクシーのようなものかも知れませんが、「駅」と言われる役割です。粕壁宿に置かなくてはならない人馬は人足 50 人、馬 50 疋でしたが、それでは負担が大変ということで、35 人の 35 疋に軽減されていたそうです。足りない場合には、近くの村から助けてもらえる助郷制度というのがあったのですね。助ける場合には税金などが免除されていたようです。それによって、幕府の交通を担っていたようです。このように粕壁宿は宿場と駅としての役割を担っていたのですね。次に粕壁宿の産業ですが、江戸時代には今よりも賑やかだったようです。それが六斎市で、八坂神社で開かれていました。毎月 6 回、4 と 9 のつく日に市が開かれて米や木綿、生活必需品などが売買されていたそうです。

※さらに、最勝院、粕壁宿の舟運、歴史を伝える標識に期待、粕壁宿の現在、花餅の話へと進みました。

軽妙なテンポで粕壁宿の名所を説明される篠さん姿には感謝ですね。